

ネットワーク時代の今を追う
<http://www.wakabayashi.com/internetroad21/>

BBC「第2次世界大戦 人びとの戦争」事業 記憶装置を革新するマルチメディア

人びとの記憶へ

2006年7月20日、日本経済新聞の大スクープの衝撃が列島を揺るがした。元宮内庁長官による昭和天皇の発言メモが発見されたのである。その内容は「A級戦犯合祀」や「靖国神社」に直接関わるものであった。

在位期間のうち20年間は憲法上の大権と統帥権を有していた方の記憶。メモの中には「松岡(洋右)」などの固有名詞も登場する。満鉄総裁、外務大臣を歴任した「松岡」の名を、国際連盟脱退の際に総会場から退場する主席全権「松岡」のニュース映像の記憶と重ね合わせた読者も少なからずいたであろう。

もともと、記憶は一人一人の個人が有するものである。人びとの記憶。それは途方もなく膨大な世界である。家庭で、職場で、そして戦場で、それぞれの事情の中で記憶が形成され累積していく。しかし、それらは散逸し、忘れられ、消えていく運命にあるのだ。自らあるいは他の個人が意志を持って記録し語り伝えない限り。

第2次世界大戦中の人びとの記憶を集めて組織化しようとする事業が戦争終結60年の区切りの年、2005年を目標にBBC(英国放送協会)の手により実行された。

BBCの挑戦

英国人にとって戦争に関連して大切な記念日が3つある。1番目がDデー、

1944年6月6日、ノルマンディー上陸作戦が行われた日である。2番目がV-E(Victory in Europe)デー、1945年5月8日、ドイツが無条件降伏した日である。3番目、これが最後でV-J(Victory over Japan)デー、1945年8月15日、日本が無条件降伏した日である。

2002年にBBCの最初の企画が構想された。それは、2004年から2005年にかけて訪れるこれらの60周年の記念日を目指して、対話型のウェブサイト構築し、戦争体験者の記憶を子や孫たちに伝えよう、という事業の企画である。

BBCの事業は当初からアーカイブ、つまりオンラインの公文書づくりをめざしていた。今日、オンラインはインターネットであり、それはデジタル化による多様化したメディア(マルチメディア)の活用を意味している。インターネットを使って人びとの記憶を集めるとき、実行段階ではとりわけ高齢者の協力をいかに得るかという難題が待ちかまえている。カナ漢字文化圏に比べてキーボード文化が普及しているとはいえ、「なんでこの年になってインターネットを」という反応も最初は多かったという。

2003年11月の公式スタートを前にして、BBCの現場開拓チームがまず取り組んだのが2,500カ所を超す提携センターの立ち上げであった。センターでは、ボランティア達が戦争体験世代の人びとが自分の証言を入力するのを手伝うのである。

事業が始まって18カ月経過して状況



(写真1) BBCによる「第2次世界大戦 人びとの戦争」
<http://www.bbc.co.uk/ww2peopleswar/>より

は劇的に変化した。初めてオンライン入力を体験した高齢の人たちが自分で文字はもちろん画像のアップロードまでも実行し始めたのである。事実として、寄稿者の80%を80歳を超える人たちが占めるに至ったのである。この数字は驚異的なものと言っていいであろう。

オンラインの記事入力は、V-Jデー60周年の2005年の翌年2006年1月31日で終了した。アーカイブサイトは2006年3月に立ち上がり、引き続き大英図書館の管轄下で永久に保存公開されることが既に決まっている。

アーカイブに集まった証言の数は47,000件。その中で日本列島近辺からの記事をいくつか紹介する。

記事1 昭南島から

1942年2月15日、シンガポールの英軍が降伏。日本軍占領下のシンガポールは日本名で昭南島(Syonanto)となる。RM氏の記事である。氏は1930年

生まれ、父親は会計の専門職で船会社に勤務、民間人として日本軍占領下のシンガポールで1945年までの足かけ4年を過ごした。

降伏の前日、2月14日、あらゆるアルコール類を廃棄する命令が下る。占領軍の兵士達が泥酔の上で残虐行為に走るのを未然に防止するためだという。街中でウィスキーなどの酒瓶が建物の壁に向かって投げつけられ、街路はガラス片で溢れる。

占領下、言語と習慣のささいな違いが思わぬ悲劇的結末にもつながりかねない、と氏は言う。例えば、日本人は自分を指すときに鼻に指をもっていき、英国人は指を胸にもっていく。あるとき指を胸にもっていったばかりに何かを隠し持っていると思われて、少年は厳しい尋問に晒される。銃剣の記憶は消えない。

記事2 上海から

1941年、日本軍占領下の上海に在住していた民間人NDS氏とFM氏についての記事である。NDS氏は当時11歳、隣の大きな街つまり南京に逃げ出そうという大それた計画を立てたことがある。途中、中国の闇商人に出会ったりしているうちに親友の上級生に出会う。彼FM氏の父親は米国の海兵隊員で帰国中、母親は日本人である。彼女の親戚に日本軍の将校がいて、ハイキングのときに軍用の水筒を貸してくれた。

やがてこんな日々も終わって、家族で3年間の収容所生活。戦争が終わって15歳、解放され親友FM氏の母親を訪ねてみれば彼の姿は無し。母親が日本人ということで日本兵として徴兵されて戦死したという。NDS氏にとってこんなに悲しい日はなかった。



(写真2) 提携センターにおける入力風景
<<http://www.bbc.co.uk/ww2peopleswar/>> より

記事3 広島から

英国海軍AC氏の記事である。行き先を全く知らされずに下船させられた場所は被爆直後の広島であった。AC氏は英国海軍の公式写真班員。あたかも「宇宙服」、つまりマスク、ゴーグル、グローブそしてブーツに身を包み「爆撃による損害の写真撮影」を命じられた。

それはまるで月世界を歩いているようであった。一歩進む毎にホコリが舞い上がる。恐ろしい世界だ。子供の三輪車を見た、しかし子供はいない。私の周りには死体ばかりだ。もの凄しい熱。身の毛のよだつような臭気。「宇宙服」を着ていても放射線を充分浴びていたに違いない。あるとき以来、足の指の爪は正常な成長を止めてしまった。もうおわかりいただけると思うのだが、私の愛の生活にも影響していたのだ。

マルチメディアの記憶

最初に「人びとの戦争」のサイトを立ち上げたとき、サイトを訪問した人びとは中味が空っぽなのに驚いたという。BBCが既に集めた記録をウェブで公開したものと誤解されたのだ。そこで急遽

ウェブデザインを変更して、「新しい歴史をあなたが書く」というメッセージを前面に出したのである。

アーカイブ作りはそこで見たこと聞いたこと感じたことの「記憶」を収集するものでなければならない。歴史問題についての意見や感想を求めているのではないのである。「私はこう思う」式の感想文をいくら蓄積しても人びとの共有財産としてのアーカイブはできないであろう。この点から考えてもBBCのスタッフ達の試行錯誤、そして寄稿する人びととの接点に位置して理念を形にするモデレータ(調整役)達の労苦を多としたい。

「人びとの戦争」の記憶をアーカイブ化するアイデアは過去にもあったであろう。しかし、これだけの規模での本格的取り組みは史上初と言えよう。記憶への取り組み。それはわれわれ自身にも課せられた課題であることは言うまでもない。

Those who cannot remember the past are condemned to repeat it.

---George Santayana.

過去に学ばない者たちは同じ過去を繰り返すという罰を受ける——ジョージ・サンタヤナ

(わかばやし・いっぺい)

関連情報

● BBCによる「第2次世界大戦 人びとの戦争 (WW2 People's War)」
<<http://www.bbc.co.uk/ww2peopleswar/>>

● 大英図書館
<<http://www.bl.uk/>>

[注]

「第2次世界大戦 人びとの戦争 (WW2 People's War)」は戦争時の記憶のオンラインアーカイブであり、それはひとりひとりの公衆が寄稿し、BBCが収集したものです。このアーカイブは、[bbc.co.uk/ww2peopleswar/](http://www.bbc.co.uk/ww2peopleswar/) において閲覧することができます。